震災復興 道半ば

「岡山日日」元記者 河田さん
NYから世界に発信

国際フォトジャーナリストの河田雅史さん

昨年廃刊となった夕刊紙「岡山日日新聞」の元記者で、総社市在住の国際フォトジャーナリスト河田雅史さん(42)が、東日本大震災の被災地の復興の歩みを紹介する写真展を3月6～10日、米ニューヨークの日本ギャラリーで開く。「1年近くたっても、復興は道半ばであることを世界に伝えたい」といい、賛同する国連教育・科学・文化機関（ユネスコ）平和芸術家で作曲家の城之内ミサさんも、初日に会場でライブを行う。（有留貴博）

河田さんは、1992年に岡山日日に入社。主にカメラマンとして県内で取材活動を行う傍ら、休暇を取って五輪やサッカーW杯などの世界的イベントや、阪神大震災などの被災地を訪れ、撮影を続けてきた。

東日本大震災の発生直後の3月24～26日も、岩手県でボランティア活動を行うため、東京から空路で花巻空港に向かったが、レンタカーなど移動手段がなく、現地で医療活動をしていた国際医療NGO「AMDA（アムダ）」（岡山市）の仲介で、同県大槌町などで炊き出しなどを手伝った。

この時、総社市がAMDAに提供した公用車の電気自動車（EV）が、ガソリンや軽油が不足する被災地で活躍する姿を見て、思わずカメラを向けた。真っ赤なEVが、津波で民宿に乗り上げた観光遊覧船「はまゆり」の前を通り過ぎた瞬間、シャッターを切った。

その写真は、総社市やEVの製造元の三菱自動車を経て、5月8日付のニューヨークタイムズ紙に「被災地を助ける電気自動車」と記事付きで紹介された。

来月6～10日 写真展

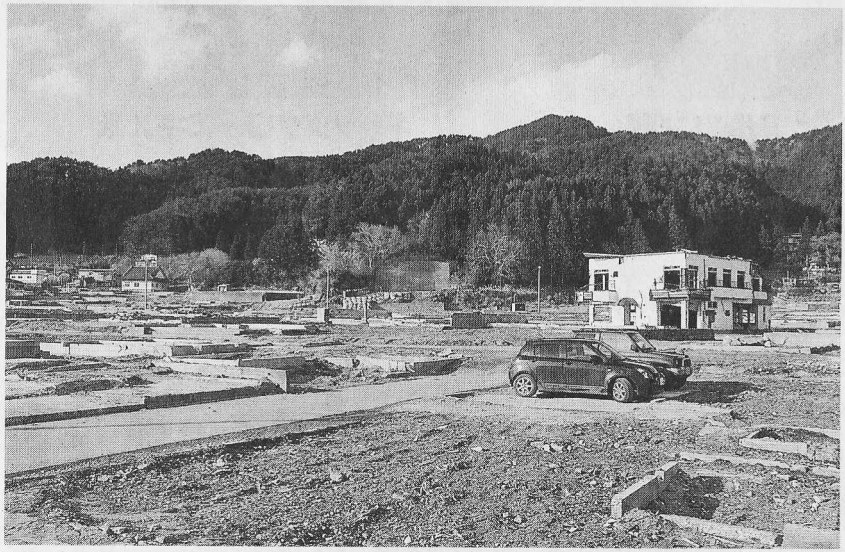
河田さんは今年1月末と2月上旬にも取材のため被災地入りした。EVを撮影した場所を訪れると、がれきはなく更地が広がり、観光遊覧船が取り除かれた民宿の建物だけが残っていた。「被災地のニュースは、時間とともに世界に発信されにくくなっているが、復興にはほど遠い現状を伝えたい」との思いを強くした。

写真展を開くニューヨークは、01年9月11日の米同時テロの発生後、度々訪れては撮影してきた思い入れのある場所。「テロと大震災、ともに忘れてはならない出来事。世界中の人が交流するこの地で、被災地の現状と、今後も支援が必要なことを訴えたい」と話す。

城之内さんとは写真展の準備を進めていた1月、知人の紹介で出会った。被災地支援に力を入れる城之内さんは「私も震災1年に何かしたいと思っていた」といい、会場でピアノを演奏してくれることになった。

写真展は「いのちの絆 東日本大震災から1年を迎えて」と題し、被災地の町並みや、子どもたちの笑顔など約30点を並べる予定。

EV撮影場所 ▼▼▼ 更地のまま



㊤被災地で活躍した電気自動車と津波で民宿の上に乗り上げた観光遊覧船「はまゆり」（11年3月26日）㊦「はまゆり」が取り除かれた民宿（右奥）周辺。更地が広がっている（今年2月9日、いずれも岩手県大槌町赤浜で）＝河田雅史さん撮影